

今回は5章の終わり。イエス様が、ゲラサの地で悪霊につかれた男を癒し、再びカペナウム側へ戻って来て、今度は12年間の長血の女性を癒し、会堂管理者のヤイロの娘を死から生き返らせました。弟子たちにとっては、あまりにも驚くべき奇跡の数々に、その信仰もますます強められた。ということだったでしょう。本日の6章1-6節はその次の出来事となります。主に3つのことをご一緒に考えたいと思います。

①イエス様の郷里である「ナザレの町とその人々」についてです。

1節「イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。」イエス様の郷里と言えば、ナザレです。ナザレの町は、カペナウムから南西の方向に約30キロ行ったところにある町です。歩けば半日はかかるそこそこの距離です。またこのナザレの町は、旧約聖書には出てきません。ですから新約聖書時代に入ってから、この町の名前が登場してきました。つまり比較的新しい町であったといえます。もしかすると昔は別の名前だったかもしれませんが、詳しいことは分かりません。そしてこの「ナザレ」という意味は、「見張り」という意味があるようです。おそらくは軍事的にそれなりの役に立っていた町だったかもしれませんが、それも、実際にどれほどだったかは分かりません。さらにナザレは異邦人の地ガリラヤと呼ばれた地域にありましたので、異邦人も住んでいたと思えます。あるいはユダヤ人との混血の者たちも居たでしょう。それから2節で、「安息日に会堂で教えた」と記されていますので、やはりユダヤ人も住んで居たことが分かります。また近年の考古学調査によれば、このナザレの町の人口は、最大でも僅か480人程度だっただろうと言われているようです。ある注解者はナザレの人口は200人程度であったと記しています。ですから、ナザレの町とは本当に小さな「村」の様なところだったと考えられます。そこにこのイエス様ご一家が、主のお告げを受け、エジプトから引っ越してきて、少なくとも20年以上は住んでいた地域でした。そこへイエス様は、弟子たちを連れて里帰りをしました。

これだけ小さな町(村)ですから、ナザレの人々にとってイエス様とは、「ああ、ヨセフさんとこのイエス君」ということで、誰もがイエス様のことを良く知っていたことが容易に想像できます。きっとそうだったでしょう。しかし、彼らがイエス様のことをその幼少期のころからよく知っていた。ということが、彼らのつまずきとなりました。3節を見るとそう、記されています。

3節「この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟ではありませんか。その妹たちも、私たちとここに住んでいるではありませんか。」こうして彼らはイエスにつまずいた。」3節初めで彼らは「この人は」と、イエス様に対して「主」ではなく、「この人」と言いました。ナザレの人々にとってイエス様は、その幼少期のことも含め、家族に至るまでも、良く知っていたためか、この時イエス様は、すでに周りの地域の人々には、少なくとも「預言者」と言われるほどでしたが、ナザレの人々は「この人」という言い方をしています。彼らは、これまでの思い出や、そういった予備知識が邪魔をして、純粋にイエス様のことを、「預言者」としても見れずに、まして「神」として見るのが、非常に難しくなっていました。ですから、その前の2節で「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行われるこのような力あるわざは、いったい何

でしょう。」と驚いて、一部は神としてのイエス様に対する正しい評価をしていたにも関わらず、この3節との関わりの中で、それが一つに結びつけられませんでした。『自分たちは、このイエスとは何者かであるかを知っている。それは大工だ。そして兄弟姉妹たちもずっとここで育っているじゃないか…』ということです。また、毎週会堂で教えられる聖書からも、「ナザレからは救い主は出ない」ということも知らされていたでしょうから、彼らは考えれば考えるほど、ますますこのイエスという人物は、どんなに神の様な素晴らしい知恵や力を持っていたとしても、どうしてもそれが「イエス君」ではあっても、「救い主」または「神」であるなどということには、到底結びつかなかったのです。聖書はそれを「こうして彼らはイエスにつまずいた」と記しています。「つまずく」とは、「罪を犯させる」という意味があります。とすれば、イエス様がこのナザレの人々に「罪を犯させた」のでしょうか。いいえ。そうではありません。彼らは、自分の先入観、自分の尺度、自分の価値観、自分の知識、自分の固定概念、そういったものから解放されていませんでした。常に自分を中心として物事を考えていたのです。それこそが自己中心ということです。つまり自分自身の考えで勝手にイエス様につまずいたのです。

もし、ナザレの人々が言葉悪くても、「おい、イエス君、君は実際はどうなんだね。やっぱり救い主なのかね？私達は君を信じていいのかね？」という考えや聞く耳を持ったり、あるいは謙虚になって、「いや、私はあなたの生い立ちも、そして聖書の言葉も知っているが、あなたの様な知恵や神の力を表せるものは居ないと思います。だから、あなたを信じてもよろしいでしょうか。」と、本当に真理を知るために彼ら一人一人が心の底から飢え渴いていたらどうでしょうか。

ヨハネの福音書の3章にユダヤ人の指導者でニコデモという人が出てきます。彼は年配者で、ユダヤ教の教師の中の教師という立場でしたが、真理に飢え渴き、自分がどうしても分からないことについて、人目を忍んで夜、こっそりと、若干30歳の若いイエス様のところにやって来て質問しました。そうしてそこで彼は真理を知ったのです。先入観や固定概念ではなく、真理を求めて自分でイエス様のところの直接きて調べたのです。もし人が、物事を自分の価値観や先走った先入観を持ちながら、表面的な会話や交わりしかしないなら、そこから本当の真理というものを、いったいどれだけ知ることが出来るでしょうか。またその奥にある真理や核心部分に至るまでの、十分な豊かな交わりを持つことが出来るでしょうか。

ナザレの町の人々は、自分たちの知識が邪魔をして真理を見つめるために、イエス様のところに来ることが出来なかったのです。「こうして彼らはイエスにつまずいた」のです。結局彼らは自己中心という自分の愚かさゆえに、つまずいたのです。つまずくというのは、多くの場合、問題は相手ではなく、自分にあるということを自覚したいものです。ある注解者は、この箇所のことを、「親しき中にも礼儀なし」だった。と記しています。

②イエス様の「家族」についてです。

先の3章の最後で、イエス様がカペナウムで伝道している時に、母や兄弟たちは「気が狂ったのだ」という人もいたので、迎えに来る出来事がありました。家族の者たちは、この時イエス様の働きを認めていませんでした。またこれより後の出来事でも、「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである。(ヨハ7:5)」とはっきり記されていることから、家族の者たちは、イエス様が宣教活動しているしばらくの間、イエス様を信じていませんでした。

3節を見ますと、ナザレの町の人々が、イエス様と家族について言及しています。そこにはイエス様の

ことを「彼は大工で」と告白しています。「大工の息子」ではなく、「大工」である。ということです。また、彼らはイエス様のことを、父親であるヨセフの子としてではなく、母親である「マリヤの子」と言いました。これは実に不思議です。聖書の中で母親の名前を出して〇〇の子と記すことほとんどないからです。大抵は父親の名前を付けます(ゼベダイの子ヤコブとヨハネなど)。ではなぜ、ナザレの人々はこのように言ったのでしょうか。もしかするとそれは、イエス様の父親であるヨセフはずっと前に他界していた可能性があるということかもしれません。それでイエス様は、父親を失った一家の長男として立派な大工として働いていたということが、この3節の「この人は大工ではありませんか、マリヤの子で・・・」と、ナザレの人々はイエス様のことを見ていた。ということだったのかもしれませんが。ただし他の福音書では、この箇所のことを「大工の息子」、または「ヨセフの子」とも記しているのですが、マルコのこの箇所だけでそうしたことを断言することはできませんが、それでもマタイでも「母親はマリヤ」と母親のことがあえて記されていることから、父親のヨセフが他界していた可能性を完全には否定できないということが言えます。ある注解者は、『父親であるヨセフは早い時期に他界している。』とも明記しています。

もし、そうであるとすれば、父ヨセフを失ったこの家では、稼ぎ頭の長男イエスが家族のために働かないわけですから、家族の稼ぎは本当に少なかったでしょうし、家計も本当に厳しかったと思います。そして周りからは、「気が狂っている」と言われていたのですから、家族の対応というのは、それなりの厳しいものだったのは容易に想像できるように思います。

人間的なイエス様としてみれば、早いうちに父親を亡くしたので、どこか寂しい気持ちもあったでしょう。それなのに、家族の誰からも信じてもらえず、かえって冷たい目で見られているとなると、本当に悲しい思いがあったかもしれません。しかしこれは、言い換えればイエス様は父親を亡くした者の気持ちをもよくご存じだということです。

さて、イエス様の家族は、ナザレの人々以上に、誰よりもイエス様と近く親しい関係でした。しかも母親のマリヤにしてみれば、イエス様がそのお腹に宿る前から、御使いガブリエルによって受胎告知を受けました。そしてあの素晴らしいマリヤの賛歌とよばれる賛美を神に捧げ、そうしてとんでもない祝福と奇跡の中でこのイエス様を産み、そして神からのお告げの通りに名前をイエスと付けたのです。さらに宮参りでは、シメオンとアンナという預言者によって、高らかに主の栄光が語られました。またそこから今度はヘロデ王から逃げるためにエジプトへ行き、そしてまたお告げを受け、ナザレに移り住んできたのです。そういった過去を振り返れば、このイエス様について、神の子であるということ、疑うことのほうが難しいものです。

イエス様は、後の箇所で弟子のピリポに、「こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らなかったのですか。わたしを見た者は、父を見たのです。(ヨハ 14:9)」と語っています。これはイエス様を見た者は、父なる神を見ることが出来た。ということですが、イエス様は、宣教活動を始めてから、初めてそのように父なる神を表すように変わった。ということではなく、生まれるずっと前の旧約の預言から始まり、またマリヤに現れた御使いの知らせや、ナザレの人々、あるいは兄弟姉妹と共に成長していった幼少期、青年期に至るまでも、彼らはイエス様と過ごす中で、はっきりと父なる神を知ることが出来たはずなんです！実際、イエス様が十字架にかけられる前の裁判では、イエス様の過去を知っているナザレの人々や家族の誰からもイエス様について不正を見つけ、訴える者はいませんでした。そのようにずっと神の証をされてきたイエス様ですが、この時も母親のマリヤさえもイエス様のことを

信じていなかったのです。もし信じていれば、家族にはっきりと伝えていたでしょう。そして僅か500人足らずのナザレの人々にもはっきりと伝えていたと思います。マリヤには、イエス様に対する信仰がまだ確信とまでにはなっていなかったのです。こうしたことから、人間とは、それほど神を信じにくい者だと言えます。そしておそらく彼女のことを別の言葉で言うなら、イエス様への信仰と自分の価値観との間で揺れていた。ということだと思います。そしてそれはあの洗礼者ヨハネも同じでした。彼は自分がイエス様に洗礼を授け、はっきりと御霊が鳩のように下って来たのを見て、そしてこの人はメシヤであると確信を持ったのにもかかわらず、最後は、「来るべき方はあなたですか？」と、疑ったのです。彼も又、信仰と自分の考えの中で揺れていました。信仰ということと、自分の理性、考え、価値観、そういったもの間を行ったり来たりしていた。ということです。悲しかな、これが人の現実であり、またこれが人の愚かさ、罪深さである。ということです。そしてこの罪が、イエスを神である。という事実とそれを信じる信仰から、遠ざけてしまうんです。目を塞ぐんです。覆いが掛けられるんです。彼らほどの圧倒的な神からの奇跡を経験してもそうなのですから、私達はなおさら、その信仰を保つためには、よほど意識しなければなりませんし、また自分とは本当に簡単に信仰が揺れてしまう、罪深いものだという自覚も必要だ。ということです。イエス様の家族は誰よりもイエス様のことを知っていたのですが、人の罪ゆえに神を見上げることの難しさの中にいた。ということです。

③「イエス様」ということです。

4節でイエス様は、「預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。」と言われました。これはユダヤ人の間でことわざのようにいわれていた言葉だったようですが、イエス様はナザレでの出来事の中に、この言葉を用いました。つまり、この郷里宣教は、それほど不遇なものだったということです。6節aに「イエスは彼らの不信仰に驚かれた。」と記されていますが、この「不信仰」という言葉は、「信仰が無い」という意味です。ですから、ナザレの人々には、イエス様に対する信仰が無かったということです。

さて、イエス様はこれまであらゆる悪霊を追い出し、さらには嵐をも静め、そして死んだ娘をも生き返らせる誠の神であることを証してこられました。また律法学者の心を見抜いたり、人の心をも知っているお方でした。ですからこの時、イエス様がナザレの人々の心やその信仰、またあらゆる状況を知らなかったはずがありません。つまりイエス様は、すべてをすでにご存知だったはずですが、それなのになぜ、あえて郷里に行かれ、せつかく信仰が成長してきた弟子たちの信仰が惑わされ、浮き沈みになるような所へ連れて来たのでしょうか。そう考えるとイエス様のナザレでの宣教の目的は一体何だったのでしょうか。

考えられるのは、ナザレの人々がどうであろうが、イエス様は御自分の宣教のわざをなして、彼らに、変わらない神の愛を伝えた。ということです。そしてそこから、本当に極僅か、少数ですが、イエス様を信じる者たちが居た！ということです。

もう一度5節をお読みします。

5節「そこでは何一つ力あるわざを行うことができず、少数の病人に手を置いていやされたただけであった。」とあります。これは「不信仰」という「信仰が無い」多くの人々の中で、本当に少数の者たちの中にはイエス様に対する「信仰」があった。ということです。それゆえに彼らは癒されたのです!!

病の中にある者は、多くの場合、傲慢という罪深さが砕かれ、へりくだって純粋に神の救いを求めま

す。この少数の者たちの中には、まさしくそういった純粋な信仰があった。ということでしょう。そしておそらく、このナザレでは、この時のこの少数の者がきっかけとなり、あるいは宣教の「核」となり、信仰の継承がその地域で行われていったのかもしれませんが。そしてついには、あのイエス様の家族にも、その揺れていた信仰の思いから、次第に「確信」へと変わっていったのかもしれませんが…。

このイエス様の家族の中から、後に聖書の中に明確に記されているのは、エルサレム教会の指導者の一人で、またヤコブの手紙を記したヤコブが信仰に導かれています。またユダもユダの手紙を記しています。母マリヤも信仰へと導かれています。聖書では、少数の者たちが非常に重要な者たちである。ということ「残りの者」という言葉で良く記しています。

ですからイエス様がナザレに行く時に、「どうせ宣教してもダメだろう。だからやらない…」ということではなく、変わらない神の愛を一人でも多くの者に伝えるために行った。ということだと言えます。そしてもう一つは、弟子たちを郷里に連れて行くことで、自分の過去もすべてを知らせた。ということですよ。イエス様にとって、このナザレでは確かに不遇な対応をされたかもしれませんが。しかしイエス様の生い立ちのすべてを知っているナザレの人々の言葉からは、イエス様の不正を過去のどの時代においても聞き出すことも、知ることもできませんでした。こうしてイエス様が弟子たちに自分の過去のすべてを見せることで、弟子たちがますます本当の信仰に結びつき、さらに成長するようにと、あえて郷里へ連れて来られた。ということなのかもしれません。それこそが、このナザレでの宣教目的だったのではないのでしょうか。

さて、最後に今日のこの箇所から、大きく二つのことを教えられて終わりたいと思います。

①信仰とは、どんなに神の御業を経験し、また教えられてきても、また自分のそばにイエス様が何十年と一緒に居たとしても、その人に本当に結びつかなければ、何の意味もない。ということです。すなわち、不信仰に終わってしまうということです。そして、信仰を獲得するためには、やはり自分と神、自分とイエス様という関係で、真摯に見つめ直さなければならない。ということです。

②信仰に導かれるというのは、本当に驚くべき神の恵みである！ということです。御使いから受胎告知を受けたあのマリヤでさえも、イエス様を信じていない時があったのです。ですから、今の自分に信仰が与えられているというのは、本当に驚くべき神の恵みです。この信仰を、あの「少数の病人」からナザレの宣教がさらに拡大していったように、今選ばれている少人数の私達から、更に信仰へと導かれる者が興されるように、与えられた信仰の光を輝かせて行きたいと願わされます！

参考箇所：マタイ 5:14-16

「あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。また、あかりをつけて、それを柵の下に置く者はありません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいる人々全部を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせ、人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」

主イエスの救いの恵み、信仰の光を大胆に輝かせようではありませんか！！アーメン。